

ヨーロッパの魔女裁判

—— 近代ヨーロッパの闇 ——

日 置 雅 子

【はじめに】

魔女という女性の存在やその生業の歴史は極めて古く、それは遠く太古の昔に遡る。豊穡を願い吉兆を占う祈祷という行動様式が社会に生まれるが、その担い手が古代国家の発展の過程で男性中心に移行するにつれて、女性は次第に国家の霊的・宗教的な地位から駆逐されていく。その結果、女性の霊的な能力は社会の周縁、即ち民間信仰の中ではそぼそと生き延びていくことになった。巫女や女降霊術師、女魔術師がそれであり、魔女もその範疇で捉えられてよい。

ところがヨーロッパでは、むしろ啓蒙の近代に入って、無実の女性たちが「魔女」として大量迫害の犠牲となるという、言わば「栄光の近代」ヨーロッパに恥辱の歴史を残すこととなった。

【一】暮しの中の中世の魔女

古代を経て中世の社会に生き延びた魔女は、庶民の中にあつては比較的平穏な生活を送っていたものと想像される。呪術的魔術的世界観が支配的であった中世の社会、とりわけ農村社会にあつては、天候や作物の出来を占い、薬草を煎じて病気の治療にあたり、経験や占いで住民の相談相手にもなった魔女は、むしろ共同体の日常生活にとって必要な存在であった。もちろん、占いや予言が外れて大凶作になったり、薬草の調合に失敗して人を死なせた場合には、民衆によるリンチを受け、時には死に至ったこともあろう。魔女が意図的に反社会的な行為を行った場合には、裁判にかけられて厳罰に処されたこともあった。魔女が処刑された記録は、紀元前のエジプトやギリシャの時代に遡る。

このように、中世末葉までの魔女に対する厳罰の大半は、魔女の「個々の悪しき行為」に対して行われたのであって、魔女一般に対する迫害に及ぶことはなかった。当時のカトリック教会も、呪術による悪習を取り締まることはあっても、魔女に対する取り締まりは穏やかなものであった。旧約聖書の出エジプト記には「重大な犯罪的行為を行う魔女は生かしておいてはならぬ」とあるが、新訳聖書には何の言及もない。

【二】近代における魔女裁判の嵐

中世を比較的穏やかに過ごしていた魔女にとって、事態に大きな変化が生ずるのは14世紀に入ってからである。この時代は、教皇権の没落とそれに伴う教会の混乱、英仏百年戦争等の戦乱、ペストの惨禍等々、社会の混乱と不安が一気に加速した時代であった。そのような中で、魔女観における本質的な転換が起こる。キリスト教では、神（絶対的正義）に対して悪魔（絶対的悪）が対置されるが、この「悪魔と結託した魔女」という新しい魔女観が登場した。これによって、魔女の個々の行為ではなく、魔女であること自体が弾圧の対象になったのである。その開始は、とかく迷信的で残忍との噂があった教皇ヨハネス二十二世による「魔女狩り解禁令」（1318, 1320）であった。15世紀に入ると、教皇インノケンティウス八世が「魔女教書」（1485）を公布し、それによって大規模な魔女狩りが正当化されることとなる。

このような状況下で、各種の魔女論が打ち出されるが、中でも魔女迫害に最大の威力を発揮したのが二人のドミニコ会士によって著された『魔女に与える鉄槌』（1485）である。この魔女論は、魔女の異端論証・魔女の妖術と悪行・魔女裁判の具体的方法の3部構成から成り、魔女裁判の理論と実践の書として、折しもグーテンベルグの印刷機にのって広く西欧全域に流布した。もはや無学な魔女が異端であるかどうかの神学的論証は必要なくなり、魔女と言うだけで異端のレッテルを貼り、火刑場に送り込むことが可能になった。犠牲者を大量に発生させた最大の理由は、単なる噂や密告だけでも逮捕・拘禁でき、しかも厳しい拷問の末に複数の共犯者名を強制的に自白させたことである。ひとたび魔女裁判に火がつくと、大量迫害に発展した所以である。

この恐るべき魔女論は、まずは少なからぬ聖俗の教養人の心を捉え、やがて一般民衆の間にも浸透していった。迫害の対象になったのは、社会の底辺に位置した女達、既に魔女や占い女と言われた者や魔女そうろうの貧しい老婆がそれであった。迫害の拡大につれて、生まれた児に悪魔の刻印を押すとされた産婆や女の医者、さらには隣人から妬まれたりしていた普通の女達に、極端な場合には社会上層部の女性にまで及んでいった。

【三】魔女迫害の地域的特徴

もとより、魔女狩りの嵐は時期的にも地域的にも一様ではなかった。異端審問の厳しかったスペインでは、15世紀後半に国家と教会が一体となって過酷な魔女裁判が展開されたが、しかし裁判の横行が社会の混乱を招くと見るや、中央集権化した王権の手で抑えられることとなり、1600年頃で一応の終息を見た。

フランスでは、全体として王権による抑制が効いていたと言えるが、「ナントの勅令」(1598)で宗教内乱を終息させ「信仰の自由」を保証したアンリ四世の時代にむしろ大量迫害が発生した。しかし、それも、絶対王政期のルイ十四世の時代に廃止布告が出されて終わりを遂げる。

イギリスでは、皮肉にもエリザベス一世の時代に魔女に対する法令が制定されるが、しかし拷問や生きながらの火刑は禁止されていた。このように中央集権化が進行していた国々では、迫害の嵐による荒廃や治安の乱れが問題視されるにつれて、国家権力によって抑えられていくことになる。

これに対し、皇帝権が弱体化の一途を辿り、群小の領邦国家に解体しつつあったドイツでは、中央権力による抑制が効かず、地方的な相違はあるものの、最も苛烈かつ長期にわたって迫害の被害を被ったのである。

【四】ドイツ・トリアー選帝侯領における魔女迫害「フラデーの事件」

魔女迫害の被害者の大半は、言うまでもなく女性であった。しかし、迫害に異を唱えた聖職者や都市の有力者など、男性が魔女として処刑台に送られたことも事実である。その典型的な事例として、1589年に中西部ドイツのトリアーで起こった「フラデー事件」を取り上げてみよう。ちなみに同市は、トリアー選帝侯領の首邑都市である。

フラデー(1534-89)は、祖父の代から社会的に上昇したトリアー市民の家に生まれ、大学教育を現在のベルギーで受けて法学博士の学位を取得、弱冠23歳でトリアーの副司法官に任ぜられた。時の選帝侯ヤコブ三世の寵を受けて官位を駆け上り、最終的には1580年頃選帝侯代理の地位にまで登り詰めた。トリアー市長を凌ぐ都市行政の頂点である。また、1577/78年にはトリアー大学法学部教授、1586年には同大学総長に就任した。彼の輝かしい履歴の集大成であるが、同時にそこには、悲劇的な転落への道が用意されていた。

1586年から87年にかけて、この地方を深刻な凶作が襲い、多くの民衆が飢えで死亡した。この時代、飢饉は魔女のなせる業として、往々にして魔女迫害のきっかけとなったのであり、この時も例外ではなかった。不穏状況が続いた1587年の春、選帝侯ヨハン七世の宮廷で、誰かが侯に魔術をかけたという噂が囁かれた。イエズス会の修練校にいた15歳の少年が、眠っている選帝侯にフラデーが毒を盛ったと告発したのである。折悪しく、選帝侯ヨハンは病床にあって数日間は生命の危険すらある状態であったため、それは魔女に対する彼の恐怖心を煽り立てるに充分であった。

フラデーは必死になって噂の打ち消しに奔走したが、すべて無駄に終わった。翌年7月、選帝侯ヨハンは裁判手続に入ることを命じ、予備審問が何度も行わ

れた。この間、フラーデの同僚でもあった市参事会の主立った面々は彼の救済に奔走したが、裁判を阻止することは出来なかった。1589年8月15日に始まった裁判では、厳しい審問が5回にわたって展開された。曰く、悪魔との契約を結んだのかどうか、悪魔との契約なしに「女の姿をした悪魔」との淫行がどうして可能であったのか、どのようにして悪魔の罠に陥ったのか、魔女のサバトはどのようなであったか、共犯者は誰か等々、いずれも答えようのない質問であり、もちろん彼はそれらを全面的に否定した。しかし、結局は厳しい拷問の末に突きつけられた罪をすべて認めることになる。裁判は同年9月18日に結審し、「生きながらの焚刑」という最も重い判決が下された。処刑は即日行われたが、選帝侯の慈悲により、絞首の上での火刑に減刑された。

以上が事の顛末であるが、この事件は、フラーデほどの地位と権力を備えた者でも、一旦魔女の嫌疑をかけられたが最後、血なまぐさい拷問の末に火あぶりになるという端的な例である。帝国中の耳目を集めたこの裁判は、魔女裁判史の中では必ずしも例外的な事例ではない。実は、彼の処刑に続いてトリアーでは、フラーデの同僚であった市参事会の有力者、特にその時の正副二人の市長や元市長ら、計5名もの市長歴任者が相次いで魔女の嫌疑で逮捕され、うち2名が獄中死、残る3名が処刑されて果てた。彼らの名前は、当地の裁判官ムジールが306名の魔女を収録した処刑簿の共犯者リストにも、フラーデの名前とともに幾たびも登場させられている。

このような展開の背景として、先ず政治的に考えられることは、魔女裁判に対する市参事会の姿勢である。これまで市参事会は、魔女狩りに対してはとかく抑制的な政策を取り、フラーデ事件においても、当初は彼を擁護し続けた。このことは、選帝侯や魔女迫害推進の強硬論者であったトリアー副司教ビンスフェルトらにとって由々しき事態であった。また、この市参事会弾劾という事実の中に、都市自治の象徴である市参事会の弱体化を図った領邦権力の意思が透けて見える。近代化の過程において領域権力の集権化を図る選帝侯周辺にとって、都市の伝統的な自治権はむしろ排除したいものであったに違いない。

他方、民衆次元では、競争を勝ち抜いて社会的な地位や富を築いた有力者に対する彼らの妬みが考えられる。その矛先が、時の社会的経済的な不安と相俟って、フラーデや市参事会関係者に集中的に向けられたということであろう。政治的な権力闘争であれ大衆の怨念であれ、社会的地位のある人物を抹殺する格好の手段がその妻や娘、あるいは本人自身に魔女の嫌疑をかけることであった。その意味では、近代という熾烈な競争社会の展開の中で、男性が魔女迫害の対象になることは決して珍しいことではなかったのである。

【おわりに】

16、17 世紀中心の近代の魔女迫害は、女性に対する謂われなき偏見と『鉄槌』を始めとする魔女論の社会的浸透の中で、魔女の噂が集団的ヒステリーに陥った民衆の熱狂的な迫害願望を駆り立て、それが時の行政当局の迫害意思と一致したとき、通常では考えられない魔女狩りを横行させた。

しかし、さすがの猛威をふるった迫害も、当局の政治的対応の変化や、大量迫害による被迫害者の枯渇、さらにはヒューマニズムや啓蒙思想、近代科学の発達によって、ヨーロッパの社会が魔術的な世界観から科学的世界観に移行する過程の中で、ほぼ 18 世紀のうちにその悲惨な幕を閉じる。ただ、この忌まわしい負の歴史は、その後人々の記憶の中でも、あるいは栄光の近代の歴史叙述においても、長く封印されていくこととなった。

魔女裁判、それは人間の理性に対する痛烈な反証であり、我々の理性はある一定期間麻痺することがありうるという証左でもある。革命の狂気やナチスの時代のホロコーストなどは言うまでもなく、現代世界においても、残念ながらその例には事欠かない。

(ひおきまさこ)